

脳 身体の機能的関連としての感情

名古屋大学大学院環境学研究科 心理学講座
大平 英樹

スピノザは、「感情とは我々の身体の活動能力を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害する身体の変状、また同時にそうした変状の観念であると解する」と言う。ここで述べられているのは、外的であれ内的であれ、何らかの刺激により我々の身体状態に変化が生じること、そしてそれが精神の中に観念として表象されること、が感情であるということであろう。こうした発想は William James に代表される感情の末梢起源説に受け継がれる。James は刺激により無意識的・即時的に身体反応が起動され、それが脳にフィードバックされることにより「感情の意識」が生じると主張した。こうした説を現代の神経科学的知見の中に位置づけようとしたのが Antonio Damasio である。Damasio は主として腹内側前頭前野のような脳の感情関連領域を損傷した患者の研究から、感情とは身体反応の脳内表象そのものであり、その一部がモニターされて「感情の意識」となると主張するに至った。

こうした感情にまつわる脳と身体の間接的関連は、古くからみられる発想であるわりには、そのダイナミクスに関する実証は乏しい。これは、脳と身体を同時に観測して、その関係性を解析する技法が欠けていたことが原因のひとつとして挙げられる。我々は、この問題に対処するために、¹⁵O による陽電子断層撮影法 (PET) と、心臓血管系、神経内分泌系、免疫系の各指標を同時に測定し、相関画像法によりそれらの関連性を可視化する方法を開発した。このツールを用いて、これまで、感情の自己制御、急性ストレス刺激の統制可能性についての認知的評価、意思決定における身体反応、などのテーマについて知見を蓄積してきた。本発表では、我々の研究知見の一部を紹介すると共に、特に、感情の生起に身体反応は必要であるのか、感情の意識はどのように形成されるのか、といった問題について考えたい。